

教育効果測定活動報告

一、はじめに

甲南大学人間科学研究所では、障がい児・障がいの者の美術教育の現場や、障がい児・障がいの者を対象とした支援団体などからゲスト講師を招き公開講座を開催している。公開講座では、障がいについての知識や、障がいをもつことによる苦悩や困難さについての理解を深めるとともに、アートを通じて彼らを支援する方法について話し合われる。

これまで二〇一六年度、二〇一七年度にかけて甲南大学人間科学研究所が主催した、市民向け連続公開講座「アートと発達支援―学校から地域社会へ―」が開催されている(1)。また、その公開講座では、学生が講座を受講することの教育効果を検討しており、『人間科学研究所紀要 心の危機と臨床の知』No.16』にて教育効果測定活動報告がなされている(沼田、二〇一八)⁽²⁾。本年度は、「アートと発達支援 連続公開講座 Vol.9 ―表現する仕事―」を開催し、引き続き教育効果測定を行っている。本稿はその活動報告であり、沼田(二〇一八)の追試で

もある。

公開講座では、受講者の大学生を対象に、受講前後に発達障がいについての意識調査を行うことで、発達障がいに関する知識や態度の変化を検討している。教育効果測定の詳細は次の通りである。

二、方法

手続き 公開講座を開始する前に、調査についての説明を行い、調査協力の同意を得た学生を対象者とした。対象者には、講座の前後に質問紙法を用いて調査を行った。

対象者 公開講座の参加者は五〇名(大学生四七名、大学院生一名、社会人二名)であり、男性七名、女性四三名、平均年齢二〇・七八(標準偏差五・四七)であった。このうち、調査協力の同意を得た欠損値の無い大学生四五名(男性六名、女性九名、平均年齢一九・七三、標準偏差一・一六)を対象とした。日時 二〇一八年十一月十七日(土) 一三:〇〇～一四:三〇
場所 甲南大学岡本キャンパス一号館三階一三一講義室

講座内容 人間科学研究所兼任研究員の服部正先生と大西彩子先生を企画者および司会者とし、NPO法人ポバイ理事長の山口未樹先生を講師に迎え、アートや音楽など障がいの者の生み出すもの、表現する行為を「仕事」とするためのアプローチの検

討や、障がい当事者、家族、職員、社会へのアプローチの展望について議論された。

質問項目 調査票は三枚で構成され、一頁目の表紙では、同意の有無や氏名、年齢、性別、職業についての記入を求めた。

二頁目には、次に示す四項目を記載した。①発達障がいについての説明(定義)を十個書いて下さい(十個の自由記述欄)。②あなたは発達障がいのある人と接点をもちたいと思いますか(五件法:「一」全く思わない、「五」すごく思う)。③あなたは発達障がいにとどのようなイメージをもっていますか(五件法:「一」ネガティブ、「五」ポジティブ)。④発達障がいのある人と接したことがありますか(二件法:「はい」と「いいえ」)。「はい」と答えた方はどのような接点をもった経験があるのかを簡単に説明ください(自由記述)。

三頁目には次に示す五項目を記載した。①〜③ 二頁目の①〜③と同様であった。④甲南大学の学生の場合はこちらにもお答え下さい。教員補助のボランティアをしたいと思えますか(二件法:「はい」と「いいえ」)。⑤シンポジウムの感想をお聞かせ下さい(自由記述欄)

一頁目と二頁目は受講前、三頁目は受講後に記入するよう依頼した。また、沼田(二〇一八)と同様に、二頁目と三頁目の①発達障がいについての説明(定義)の数を「発達障がいについての知識」と定義した。

三、結果

調査に用いた各項目間の相関 本研究で使用した発達障がいについての知識、発達障がい者への接触希望、発達障がいに対するイメージを公開講座受講前後を合わせて各変数間の相関係数を算出した(表1)。

Table 1. 調査項目の2変数相関(全体)

	接触希望 (前)	イメージ (前)	知識 (後)	接触希望 (後)	イメージ (後)
知識(前)	-.10	-.04	.89***	-.18	-.10
接触希望(前)	—	.37*	-.15	.54***	.36*
イメージ(前)		—	.04	.38*	.60***
知識(後)			—	-.17	-.09
接触希望(後)				—	.59***

* $p < .05$, *** $p < .001$

以下受講前の発達障がいについての知識、発達障がい者への接触希望、発達障がいに対するイメージを、それぞれ知識(前)、接触希望(前)、イメージ(前)とし、受講後の発達障がいについての知識、発達障がい者への接触希望、発達障がいに対するイメージを、それぞれ知識(後)、接触希望(後)、イメージ(後)とする。知識(前)と他の変数との関連については、知識(後)との間に強い正の相関

が認められた ($r = .89, p < .001$)。一方、他の変数との間には相関が認められなかった。接触希望(前)と他の変数との関連については、接触希望(後)との間に中程度の正の相関が認められ ($r = .54, p < .001$)、イメージ(前) ($r = .37, p < .05$)、イメージ(後) ($r = .36, p < .05$)との間には弱い正の相関が認められた。一方、知識(後)との間には相関が認められなかった。イメージ(前)と他の変数との関連については、イメージ(後)との間に中程度の正の相関が認められ ($r = .60, p < .001$)、接触希望(後)との間に弱い正の相関が認められた ($r = .38, p < .05$)。知識(後)との間には相関が認められなかった。知識(後)と他の変数との関連については、接触希望(後)との間、イメージ(後)との間に相関は認められなかった。接触希望(後)と他の変数との関連については、イメージ(後)との間に中程度の正の相関が認められた ($r = .59, p < .001$)。

さらに、発達障がいのある人と接した経験(以下接触経験)の有無で対象者を群分けして、各群で同様に各変数間の相関係数を算出した (Table 2)。接触経験がある群 ($n = 25$) では、知識(前)と他の変数との関連については、知識(後)との間に強い正の相関が認められた ($r = .85, p < .001$)。一方、他の変数との間には相関が認められなかった。接触希望(前)と他の変数との関連については、接触希望(後)との間に中程度の正の相関が認められた ($r = .64, p < .001$)。一方、他の変数と

Table 2. 調査項目の2変量相関 (接触経験有無別)

	知識(前)	接触希望(前)	イメージ(前)	知識(後)	接触希望(後)	イメージ(後)
知識(前)	—	-.15	.01	.85***	-.19	-.06
接触希望(前)	-.05	—	.02	-.22	.64***	.38
イメージ(前)	-.13	.68**	—	.11	.14	.61**
知識(後)	.95***	-.08	-.03	—	-.23	-.03
接触希望(後)	-.11	.44	.64**	-.04	—	.50*
イメージ(後)	-.23	.35	.60**	-.21	.71***	—

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ 右上: 接触経験有 ($n = 25$), 左下: 接触経験無 ($n = 20$)

接触経験がない群 ($n = 20$) については、知識(後)との間に強い正の相関が認められ

の間には相関が認められなかった。イメージ(前)と他の変数との関連については、イメージ(後)との間に中程度の正の相関が認められた ($r = .61, p < .01$)。一方、知識(後)との間、接触希望(後)との間には相関が認められなかった。知識(後)と他の変数との関連については、接触希望(後)との間、イメージ(後)との間に相関は認められなかった。接触希望(後)と他の変数との関連については、イメージ(後)との間に中程度の正の相関が認められた ($r = .60, p < .05$)。

れた ($r = .95, p < .001$)。一方、他の変数との間には相関が認められなかった。接触希望(前)と他の変数との関連については、イメージ(前)との間に中程度の正の相関が認められた ($r = .68, p < .001$)。一方、他の変数との間には相関が認められなかった。イメージ(前)と他の変数との関連については、接触希望(後) ($r = .64, p < .01$)、イメージ(後) ($r = .60, p < .01$)との間に中程度の正の相関が認められた。知識(後)との間には相関が認められなかった。知識(後)と他の変数との関連については、接触希望(後)との間、イメージ(後)との間に相関は認められなかった。接触希望(後)と他の変数との関連については、イメージ(後)との間に強い正の相関が認められた ($r = .71, p < .001$)。

二要因混合計画の分散分析 発達障がい者と関わった経験による発達障がいについての知識や態度の差、および公開講座の教育効果を検討するため、発達障がいについての知識、発達障がい者への接触希望、発達障がいに対するイメージについて、接触経験の有無×公開講座前後の二要因混合計画の分散分析を行った (Table 3)。その結果、発達障がいについての知識において、接触経験の有無 ($F(1,43) = 4.44, p < .05$)、および公開講座前後の主効果が認められ ($F(1,43) = 5.50, p < .01$)、接触経験がない群よりも、接触経験がある群の方が発達障がいについての知識が多く、公開講座を受ける前よりも、受けた後の方が知識

Table 3. 二要因の分散分析の結果

	公開講座前後 接触経験有無	公開講座前		公開講座後		主効果		交互作用
		M	SD	M	SD	経験有無	講座前後	
知識	接触経験有	3.88	3.30	4.48	2.92	4.44 *	5.50 **	0.22 n.s.
	接触経験無	2.25	2.27	2.65	2.56			
接触希望	接触経験有	2.92	0.70	3.04	0.84	0.20 n.s.	2.48 n.s.	0.31 n.s.
	接触経験無	2.95	0.89	3.20	0.83			
イメージ	接触経験有	2.64	0.81	3.04	0.79	0.03 n.s.	8.94 **	0.18 n.s.
	接触経験無	2.65	0.93	2.95	1.00			

接触経験有 (n=25), 接触経験無 (n=20) * $p < .05$, ** $p < .01$

が多かった。交互作用は認められなかった ($F(1,43) = 0.22, n.s.$)。また、発達障がい者への接触希望においては、接触経験の有無 ($F(1,43) = 0.20, n.s.$)、公開講座前後の主効果は認められず ($F(1,43) = 2.48, n.s.$)、交互作用も認められなかった ($F(1,43) = 0.31, n.s.$)。さらに、発達障がいに対するイメージにおいて、公開講座前後の主効果が認められ ($F(1,43) = 8.94, p < .01$)、公開講座を受ける前よりも受けた後の方が、発達障がいに対するイメージはポジティブなものだった。一方、接触経験の有無の主効果 ($F(1,43) = 0.03, n.s.$)、

および交互作用は認められなかった ($F(1,43) = 0.18, n.s.$)。

四、考察

分散分析の結果、発達障がい者と関わった経験のない群よりも、関わった経験のある群の方が、発達障がいについての知識が多かった。これは、発達障がい者と関わったことのある人は、その時の経験から得られた知識や興味関心があるためだと考えられる。また、公開講座を受ける前よりも、受けた後の方が発達障がいについての知識が多かった。公開講座を受講することで発達障がいについての知識が増加することは、沼田(二〇一八)でも同様の結果となっており、本研究の結果は妥当であると考えられる。一方、公開講座を受ける前よりも、受けた後の方が、発達障がいに対するイメージがポジティブなものであった。これは、公開講座において、障がいを持つ人の個々人の特徴や活躍の場を理解したことで、障がいという漠然とした言葉のネガティブなイメージが払しょくされ、ポジティブなイメージへと変化したことが予測される。

本研究では、発達障がいについての知識とイメージのポジティブな変容について公開講座の効果が認められる結果となった。しかし、発達障がい者への接触希望については公開講座の前後で変化が認められなかった。これは、知識やイメージと接触希

望との乖離、つまり、たとえ発達障がい者への理解が進み、イメージが良くなったとしても、自身が直接関わりたいという考えにはならないという可能性を示している。発達障がい者が社会で生きていくため、社会に受容されていると感じるためには、発達障がい者への接触希望を向上させることが必要だろう。そのためには、今回の講座のように座学で知識を得るだけでなく、実際に発達障がい者を交えて討論や実習を行う体験型の講座・ワークショップの開催が望まれる。

註

- (1) 第一回公開講座は二〇一六年六月四日(土)に開催され、参加者は六〇名(うち大学生四六名)であった。第二回公開講座は二〇一六年十月九日(日)に開催され、芸術療法に関する研究実践活動「甲南アトリエ」の一環として開催されており、発達障がいに関する教育を行っていない。参加者は小学生から高齢者までさまざまであった。第三回公開講座は、二〇一六年十二月十八日(土)に開催され、参加者は一四四名(うち大学生一九名)であった。第四回公開講座は、二〇一七年七月十五日(土)に開催され、参加者は一四三名(うち大学生一三二名)であった。第五回公開講座は、二〇一七年十一月十八日(土)に開催され、参加者は三三名(うち大学生一七名)であった。

(2) 沼田 恵太郎 (二〇一八)・教育効果測定活動報告 人間科学研究
所紀要、心の危機と臨床の知, 19, 44—48.

(木下雅博)